

2月15日、玉川大学にて第42回ミツバチ科学研究会が開催された。研究会では、研究発表のあと「ミツバチから見た森林異変」変わり続ける日本列島の森林」という演題で、森林ジャーナリスト田中淳夫氏の特別講演があった。田中氏はフリーの森林ジャーナリストとして、森と人との関係をテーマに執筆や講演活動が続いている。『森林異変』『森と日本人の1500年』（平凡社新書）、『絶望の林業』（新泉社）など多数の著書も出版している。

講演は植物の分類と系統進化の話から始まった。地球上の植物を大きく分けるとシダ植物と裸子植物（スギやヒノキ、マツなど）と、被子植物（広葉樹や草本など）の3つに分類される。最も多いの



森林ジャーナリストの田中淳夫氏（左）と筆者（玉川大学で）



変わり続ける日本列島の森林 深刻な広葉樹林や草地の減少

NPO法人銀座ミツバチプロジェクト 最高顧問 高安和夫

は被子植物で全体の約8割を占める。裸子植物は風に花粉を運んでもらうが、被子植物の多くは動物に花粉を運んでもらって受粉する。送粉動物の多くが昆虫であり、中でもミツバチ類が大きな役割を果たしている。そのため送粉者呼び集める仕掛けとして、花を咲かせ蜜を出す。現在の植物の大半が次世代を残せるのは、ミツバチ類に支えられているからといっても過言ではないそうだ。

次に日本の森について話を進めた。日本の森も歴史的に振り返ってみると、常に変化を続けており、決して「太古の昔から変わらない」森ではないそうだ。そして森が変化する要因に人の営みが大きく関わり、面積の増減はもちろん、森林を構成する動植物の種や生態系の質も移り変わる。そして特に戦後70年間に起きた日本の森の変化はドラスチックだという。

日本の森の歴史をたどると、縄文時代には焼き畑や野焼きが森の2〜3割で行われ、飛鳥時代からは寺院建設のために木材の収奪が広がった。戦国時代には大名が城や都市建設を進め、江戸時代には植林が始まるが薪炭需要の拡大で里山の荒廃が進む。さらに明治時代の文明開化と相次ぐ戦争で森林の破壊が進んだ。そして戦後日本の森林に大変化が起こるのだ。戦時中に乱伐して荒れた山々に大造林を実施し、スギやヒノキ、カラマツな

ど針葉樹を植えた。人工林は約500万ヘクタール（2倍に）増え、広葉樹林は数百万ヘクタール減少するが、燃料革命や肥料革命により里山の落葉樹林の利用も減る。造林と里山林の復活で、森林蓄積は有史以来最大になった。その後、約20年前をピークに開発や都市化が進み森林は減少傾向にあるそうだ。

さてミツバチにとって現在の日本の自然はどうだろうか。森林面積の半分以上を針葉樹林が占め、広葉樹林や草地、原野は減少している。農薬の多量散布や獣害（シカなどが木の新芽や苗を食べる）による植生の劣化も深刻である。日本蜜蜂の研究者から聞いた話では、野生の日本蜜蜂の生息数（分蜂群の捕獲数）が20年前まで年々増え続けていたそうだ。それ以降は病気やウイルス、農薬などの影響もあり減少傾向にあると言われている。まさに森林蓄積のピークと日本蜜蜂の生息数のピークが重なるのは興味深い。蜜蜂のためにも里山に花や広葉樹を植える活動を広めていきたい。

事業紹介

NPO法人銀座ミツバチプロジェクトは、2006年3月から銀座のビルの屋上でミツバチ飼育を開始。ホテル、レストラン、百貨店など銀座の老舗と連携したハチミツ商品づくりや屋上緑化、地域の生産者との交流事業を通して街の活性化に貢献。平成22年6月環境大臣表彰。平成24年4月農林水産大臣より「食と地位の『絆』づくり」選定を受ける。